

## 〔 研究 〕

## 副腎外傍神経節細胞腫の2例

足利赤十字病院臨床検査部<sup>1)</sup> 同外科<sup>2)</sup>須永 義市<sup>1)</sup> 松澤 芳江<sup>1)</sup> 中村 雅哉<sup>1)</sup>今泉 悦子<sup>1)</sup> 柏瀬 芳久<sup>1)</sup> 西見 博之<sup>1)</sup>清水 和彦<sup>1)</sup> 藤崎 真人<sup>2)</sup>

独協医科大学病院病理部

小島 勝

**Key words :** 傍神経節細胞腫, 捺印細胞

## 【 は じ め に 】

副腎外の傍神経節細胞腫は比較的稀な腫瘍のひとつである。腹腔内に、85%以上が発生するとされているが、なかでも腎下極部より上の腹部大動脈周辺にその半数が発生する<sup>1)</sup>。今回私たちは腹腔内に発生した傍神経節細胞腫の2例を経験したので、術中捺印細胞所見を中心に報告する。

## 【 症 例 】

症例1は70歳男性、噴門部胃癌(Boorman2型中分化型管状線癌)の術中に傍腹部大動脈周辺のリンパ節(所属リンパ節16番)に小指頭大の腫脹が発見され術中診を行った<sup>2)</sup>。

症例2は51歳女性、検診時、腹部エコーで右腎動脈周辺に直径3Cmの腫瘤摘出術を行った<sup>1)</sup>。

2例とも高血圧、頭痛、発汗、糖尿病などのカテコラミン分泌の過剰に伴う症状は認められなかった<sup>1)</sup>。

## 【 材 料 と 方 法 】

術中捺印細胞標本は、95%エタノールで固定後、Papanicolau (Pap) 染色を施した。病理組織学的検索にはホルマリン固定パラフィン切片を用いてヘマトキシリンエオジン(HE)染色、グリメリウスの鍍銀染色を施した。免疫組織学的検索には、streptavidin-biotin-Peroxidase (SAB) 法(ScySek, Logan, Utah, USA)を用いて、神経特異性エノラーゼ(NSEIBL Co., Fujioka, Japan)、クロモグラニンI mm-unotech, Marseille, France)、(Novocastra, New Castle, UK)を検索した。

## 【 捺 印 細 胞 所 見 】

Pap染色の術中捺印細胞標本は、2例とも同様の所見を示していた。弱拡大では多数の腫瘍細胞がゆるい結合性を示したり、孤立散在性に出現していた(写真1)。

強拡大では、腫瘍細胞はライトグリーン好性の広い細胞質を持つものや、紡錘形のもの、

ほとんど裸核状のものまで多彩で、顆粒状の細胞質を持つものもみられた。核は大小不同、偏在傾向がみられ、主として類円形あるいは卵円形で、2核のものも少数混在していた。核クロマチンは細顆粒状で小さいが、明瞭な核小体を持つものも見られた。(写真2)

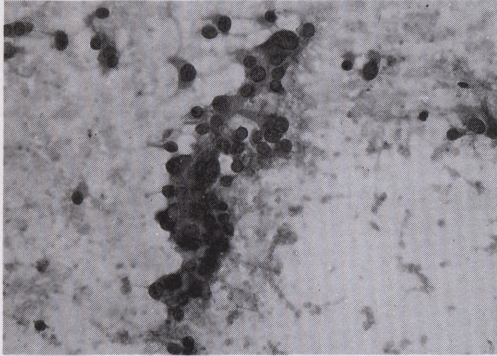


写真1. 腫瘍細胞はゆるい結合性を示したり、孤立散在性に出現している。  
(Pap染色, 弱拡大)

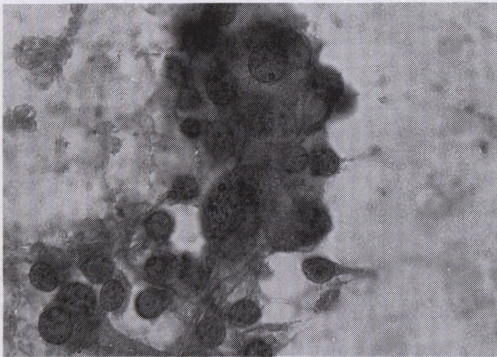


写真2. 腫瘍細胞はライトグリーン好性の広い細胞質を持つものや、紡錘形のもの、ほとんど裸核状のものが混在している。核は類円形ないし卵円形で2核の細胞も見られる。  
(Pap染色, 強拡大)

### 【病理組織所見】

HE染色標本も2例とも類似していた。弱拡大では毛細血管と繊維組織によって腫瘍組織は大小の蜂巢状に分割されていた。(写真3) 強拡大では腫瘍細胞の細胞質は多角形で、核は類円形ないし卵円形で少数の二核の細胞も混在していた。核小体は小さい明瞭なものが

通常は1個認められた。核クロマチンの増量は明らかではなかった(写真4)。核分裂像は認められなかった。腫瘍細胞はグリメリウス染色陽性で、免疫染色では、NSE、クロモグラニンが細胞質に陽性であった。(写真5)

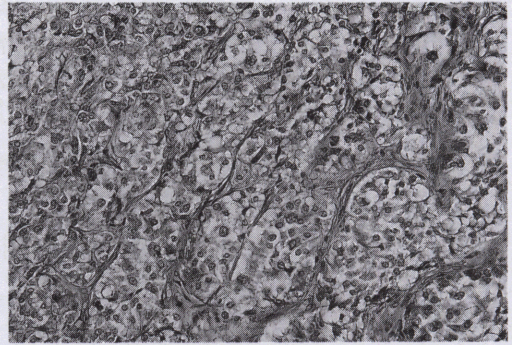


写真3. 腫瘍組織は毛細血管と繊維組織によって大小の蜂巢状に分割されている。  
(HE染色, 弱拡大)

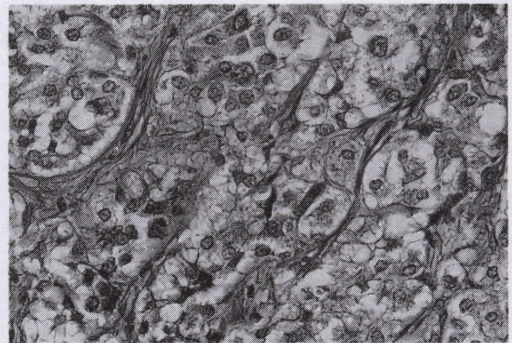


写真4. 腫瘍細胞の細胞質は、多角形で核は類円形ないし卵円形で、少数の二核の細胞も混在していた。  
(HE染色, 強拡大)

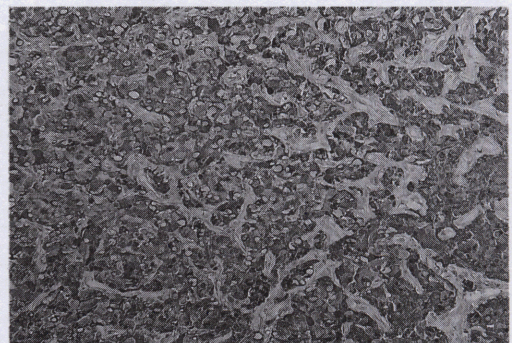


写真5. クロモグラニンが腫瘍細胞の細胞質に陽性である。  
(SAB法)

## 【 考 察 】

副腎外の傍神経節細胞腫は、25～85%の症状でカテコラミンの過剰分泌を伴う。糖尿病、高血圧などの合併症が認められるとの報告がある。また、症例によっては腹痛も見られることが記載されているが、今回報告した2例は無症状で、1例は胃癌の手術中に、他の1例は検診でいずれも偶然に発見されたものである。特に症例1のように、腹腔内臓器の悪性腫瘍の手術中に、所属リンパ節の腫張として発見され、術中診が行われることがある。その場合、凍結標本では核偏在傾向や核小体が目立つこ

とから上皮性腫瘍、例えば胃の印環細胞癌の転移と誤られることがある。捺印細胞標本は凍結標本に比し、この腫瘍細胞の性格をより正しく把握することができると思われる。

## 【 参 考 文 献 】

- 1) Lack E E. Tumor of the adrenal gland and extraadrenal paraganglia. (Atlas of Tumor Pathology, 3rd series, Fascicle 19. Bethesda, MD : Armed Forces Institute of Pathology ; 1997
- 2) 胃癌取り扱い規約(改訂第12版)胃癌研究会編. 東京 ; 金原出版. 1993